

P10-2 大腿骨頭の不安定性により股関節インピンジメントが生じていた一症例

○平田 明日香(ひらた あすか), 磯田 真理, 中村 太志, 監崎 誠一, 西川 正治
医療法人薫風会 西川クリニック

Key word : FAI, 股関節唇損傷, 運動器超音波検査

【目的】 股関節インピンジメント(以下FAI)は、股関節痛や組織変性を生じさせると報告されており、また変形性股関節症の初期症状とも言われている。FAIの術後の理学療法についてはPhilipponらが提唱したプロトコールがあるが、術前の理学療法についての報告は少ない。今回我々は臼蓋と大腿骨頭の関係性を運動器超音波検査を用いて評価し、術前の理学療法へ繋げることを目的とした。

【症例紹介】 60歳代、女性。右股関節インピンジメント症候群。主訴は夕方ごろになると右鼠径部が怠く痛くなる。ROMは股関節外転右20度/左35度、内旋右45度/左55度。その他大きな制限なし。MMTは左の腸腰筋、大殿筋、中殿筋、ハムストリングスが4レベルであった。前方インピンジメントテスト陽性。運動器超音波検査で右股関節唇に損傷を認め、右大腿骨頭は左と比較し浅層にあった。

【説明と同意】 対象者全員に対し、ヘルシンキ宣言をもとに本研究の趣旨を口頭および書面で説明し、同意を得た者のみを対象とした。また対象者は研究への参加の同意をいつでも撤回でき、それによる不利益は生じないこと、更にプライバシー保護について十分に説明を行なった。

【経過】 運動器超音波検査で臼蓋と大腿骨頭の距離を観察すると、背臥位では臼蓋より大腿骨頭が左右とも-0.10cmであった。背臥位股関節伸展位では右0.45cm、左0.10cmであった。背臥位右股関節伸展位の右腸骨前傾誘導では0.42cm、右寛骨後傾誘導では0.20cmであった。前方インピンジメントテストは右寛骨前傾誘導で消失した。

【考察】 股関節唇は関節の安定性に寄与するが、損傷により右の大腿骨頭は不安定になり前方へ移動していたと考えた。前方インピンジメントテストが右の寛骨前傾で消失した要因として、寛骨が前傾すると相対的に股関節は外旋するためインピンジメントを回避できたと考えた。また、被覆率の増大により動きが出やすくなったと考えた。従って、右寛骨前傾誘導時の股関節伸展位大腿骨頭はプローブ近位へ移動していた。しかしこの状態では大腿骨頭は不安定なままであるため、大腿骨頭を前方から安定させる必要がある。腸腰筋は股関節の前方安定性に関与しており、赤筋線維が約半数占めているとの報告がある。腸腰筋の筋力低下、筋持久力の低下により主訴である夕方の怠く痛む症状が出現していた。従って大腿骨を前方から安定させる作用のある腸腰筋などの股関節安定

に働く筋群の強化、学習が必要であると考えた。

【理学療法研究としての意義】 本症例は前方インピンジメントテストが右寛骨前傾誘導で消失した。寛骨を前傾するためや大腿骨頭の安定性に関しても腸腰筋などの股関節安定に働く筋群の強化、学習が必要であると考えた。一次性変形性股関節症へ移行させないために大腿骨頭の前方不安定を改善させる必要がある。